

40年前からの地域課題、 「アクセスと滞在者の移動手段の改善」に取り組む人

栗山 尚久 (くりやま なおひさ) さん

(一社) 豊富町観光協会事務局長

1966年愛知県生まれ。関東で育ち18歳で初めて訪れた知床に感動、将来の北海道移住に強い思いを抱く。大学卒業後は旅行会社に勤務し26歳から北海道での生活を始める。その後、観光の仕事から離れ福祉系の人材紹介のマネジメント業務を行う。合併、転勤など様々な経験を重ね、北海道好きが高じ現在の職にたどり着く。

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。18回目となる今回は、豊富町を含めた北宗谷エリアで新たな観光資源の開発や人的ネットワークづくりを進めている栗山尚久さんです。

豊富町に来られる前はどんなお仕事をされていたのですか？

全国展開している旅行代理店で18年間、旅行企画や営業を行っていました。千葉、札幌、北陸を転動していましたね。その後、旅行業界から一度離れ、病院や福祉の専門人材の人材派遣のマネジメントを6年ほど、これも札幌を含めた東日本エリアで行っていました。

観光協会での仕事を選んだ理由を教えてください

当時、45歳で小学生2人の娘と妻がいる私が、“北海道で働きたい。観光を入り口として地域で手ごたえのある仕事をしたい”と考えたとき、ハローワークで「豊富町観光協会事務局長」の仕事を見つけました。知り合いもない土地でしたが、ライスワークではなく、ライフワークを選択したのです。

今年で移住して10年目とのことですが

任意団体の観光協会からスタートし、法人格を取るための段取りをしました。少しずつ収益を出して豊富のためになること、本来の観光協会がすべき仕事のできる体力をつけるよう歩んだ10年ですね。地元の仲間を増やすことが基本ですが、宗谷管内、道北、オール北海道…と、協力者を見つけて広げていくことに注力しましたね。

力を注いだプロジェクトがたくさんありそうですね

外からのお客さまを豊富町にお連れするためには、稚内空港や豊富駅からの足の確保が大切です。史料を読み解いていると、40年前から豊富町の課題として、アクセスの改善があげられていました。国立公園の中に位置し、国民保養温泉もあるという一流の資源を持ちながら、お迎えする交通手段が弱いことを解決しないといけないと、再確認しました。今手を付けないと、未来の人たちに申し訳ないですよ。レンタカーやタクシーの利用など広域で取り組むべきプロジェクトに、着手しました。

自転車健康都市宣言の町、豊富町のサイクルツーリズムについて教えてください

二次交通の手段のひとつとして、豊富町観光情報センター（駅前）、湯の杜ぼっけ（豊富温泉）、サロベツ湿原センターで貸し出しと乗り捨てができる自転車のレンタルを行っています。

また、大自然を満喫するために、ガイド付きのプログラムを開発しました。完全プライベートツアーとして、約3時間の「電動アシスト自転車であらゆるサイクリング」は、ガイドと一緒に豊富町の見どころスポットを巡るコースです。他にも約6時間の、豊富温泉発着で雄大な景観が広がる豊富町の絶景ポイント2か所と人気のカフェ2店を巡る「心もお腹も大満足&大満足なスペシャルコース」もあります。

最後に、豊富町の宣伝をお願いします

豊富町といえば、世界的にみても「アゼルバイジャンの油風呂とここだけではないか」ともいわれる珍しい泉質を持つ日本最北の温泉郷「豊富温泉」ですね。そして、「利尻礼文サロベツ国立公園」、360度絶景の「大規模草地」の3つを紹介したいです。

豊富温泉は、東京や愛知、広島などの皮膚科の先生のすすめもあり、湯治を目的に来られる方も多く、平均2週間くらいの滞在をされる方が多いです。

サロベツ湿原や、晴れた日には海に浮かぶ利尻山・夕日が一望できる稚咲内海岸などの見どころがありま



す。兜沼に併設されているキャンプ場は、私のお気に入りの場所です。

フットパスとしてもサイクリングコースとしても最高の大規模草地は、豊富温泉側から入るコース、国道40号から入るコースによってその印象も変わります。季節を変えてぜひゆったりと早朝や星空を楽しんでほしいですね。
(2022年9月取材)

インタビュー後記

18歳のときに初めて北海道を旅して感じた「日本じゃないな北海道は!」という驚きが、旅行代理店への就職、移住につながっているように感じました。首都圏、東北、北陸、東海と日本各地を転勤され札幌に戻ったときに、「自分は家族と共にここで暮らしたい」と思ったと話されます。45歳での転職、知らぬ土地への移住を選択した栗山さんのご経験は、限られた紙面には残念ながら書ききれませんでした。“移住者お作法”としていつかお伝えいただきたいです。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表